様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０３４７

研究課題名（和文）ギリシア・ローマ文学における他者への罪責と赦しの研究

研究課題名（英文）Study of Sense of Guilt and Forgiveness in Greek and Roman Literature

研究代表者
小川　正廣（OGAWA, MASAHIRO）

名古屋大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：４０１２７０６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、西洋古代の人間・社会・宗教観において「他者」なる存在との対立・抗争や差別化を乗り越えようとするさまざまな指向を検討し、そうした危機的状況において他者との共存や共生を成立・修復させるうえで最も基本的でしかも容易には捉えがたい「罪責」と「赦し」の観念と意識の形成と発達、それらの形式や形態および相互関係について、ギリシアとローマの両古典研究のジャンルを横断した分析と考察によって明らかにすることを試みた。

研究成果の概要（英文）：　This study has investigated the various perspectives for overcoming conflicts and differentiation with the existence of "others" which appeared in human, social and religious views of the Western classical antiquity.
　Particularly it has tried to clarify the formation and the development, together with the forms and the interrelations, of the concept and consciousness of "sense of guilt" and "forgiveness", which are the most fundamental but very difficult to grasp for establishing and restoring the coexistence and symbiosis with others in those critical situations, by analyzing and discussing closely the Greek and Roman texts and researches through a cross-generic method.

研究分野：西洋古典学

キーワード：ギリシア　ローマ　他者　罪責　赦し

１．研究開始当初の背景

(1)現代世界において、集団と個人の「アイデンティティ」の問題は政治的・文化的変動の主な原動力となっている。すなわち民族・人種の反目、宗教的対立、性的差別に対する抗議など種々の次元において自己の立場を鮮明に表出する傾向が世界的に顕著になり、その結果社会科学、人類学、歴史学、文学など人文諸学でも、エスニシティ、宗教、階級、ジェンダーなどにもとづくアイデンティティの諸問題に多大な関心が向けられている。

(2)そうした現代社会の課題と連動した学術的動向の中で、種々の理論と見解を結合するタームとして「他者性(ｱﾙﾃﾘﾃ)」という概念が重要性を帯びてきた。この他者性という概念は、民族・社会階層・性・年齢などにもとづく人間の多様なアイデンティティ（自己）を、各々の側面で異質なものとの対立とその排除という視点から逆照射して検証し、より一層動的かつ全体的に規定するための方法的な立脚点として、今後なお広汎に人文学全般において有効であるのみならず、人間の本質を追究する西洋古典を対象とした文学研究の分野でも、細分化された研究状況を克服し、新たに古代文学の営為の内実とその表象的価値を提示することを可能にするものである。

(3)本研究代表者小川は、前々回の科研費補助金基盤研究(C)「ギリシア・ローマ文学における他者像の変容に関する研究」において、ギリシア初期から古典期・ヘレニズム時代を経てローマ時代までの古典文学に見られる他者像と他者認識のあり方を分析し、とくに人間と神、自民族と異民族、市民と非市民、自由人と奴隷、男性と女性、富者と貧者、老人と青年などの二項対立的構図に内在する他者意識の成立と変化について考察した。また前回の科研費補助金基盤研究(C)「ギリシア・ローマ文学における他者との共生に関する研究」では、同じくギリシア初期からローマ時代までの古典文学において個人および共同体としての他者との共存・共生のあり方を分析し、固定的な他者差別や他者排除からの脱却化指向とともに必然的に生じるより高次元の他者との共存の観念と共生の意識の形成と発達および問題点について検討した。

(4)しかしその間人文学研究における新たな動向とも接触して、当該の研究課題の範囲内では予想できなかった重要な問題に直面した。それはすなわち、民族・国家・住民の間の戦争や紛争、個人や集団の間の殺傷および物的・精神的損害などの大きな侵害が生起して相互関係が危機的状況に直面した場合、自己と他者との共存・共生の関係の成立と修復ははたして可能なのか、またもし可能であるなら、それを可能となしうる要因は何であり、さらに自己と他者はいかなる相互交渉のプロセスを経て和解や折り合いを成立させうるのかという問題である。

(5)こうした問題に関連した最新の研究の事例としては、J.G.Murphy & J.Hampton, *Forgiveness and Mercy* (1988); J.G.Murphy, *Getting Even: Forgiveness and Its Limits* (2003); C.L.Griswold, *Forgiveness: A Philosophical Exploration* (2003), M.U.Walker, *Moral Repair: Reconstructing Moral Relations after Wrongdoing* (2006); M.R.Maamri, N.Verbin & E.L.Worthington,Jr. (eds), *A Journey through Forgiveness* (2010)などの「赦し」に関する哲学・倫理学書、さらには西洋古代・中世の「赦し」を哲学・宗教・文学・歴史・ジェンダー論などの観点から論じた C.L.Griswold (ed.), *Ancient Forgiveness. Classical, Judaic, and Christian* (2012)が刊行されている。こうして現代的な意義をもともなう「赦し」の問題は、21 世紀の今日国際的な広がりをもって人文学の焦点となりつつある。

２．研究の目的

本研究は、他者との共存や共生を成立あるいは修復させるうえで最も基本的であり、しかも容易には把握しがたいギリシア・ローマ世界における「罪責」と「赦し」の観念と意識の形成と発達、それらの形式や形態および相互関係について、文学・哲学・歴史・宗教などの諸ジャンルを横断した分析と考察によって総合的に明らかにし、個人と社会の関係における危機を超克する新たな他者観とアイデンティティー(主体性)のあり方を模索することを目的とする。

３．研究の方法

具体的には、①ギリシア初期からヘレニズム期を経てローマ帝政時代までの叙事詩文学を対象として、個人間および共同体間の危機的関係における罪責と赦しの観念を探り、その変容を跡づける。②ギリシア哲学者アリストテレス、プラトンからストア学派とエピクロス学派等を経て、キケロ、セネカおよびキリスト教父などローマの哲学・思想家・宗教家に至るまでの著作の中で展開された罪責と赦しに関する言説と問題点を比較検討する。③ギリシア・ローマの悲劇と喜劇の諸作品において、社会・家族・個人の相克関係の中に生じる罪責と赦しのモチーフを考察する。④ギリシア・ローマの歴史書に見られる市民間・異民族間・異宗教間の対立と抗争にともなう罪責と赦しの事例について検討する。⑤以上の４点の検討を経て、人文学全般から提示された諸仮説や諸見解を最終的に批判・検証し、古代ギリシア・ローマにおける罪責と赦しのあり方と他者との新たな相互関係の再構築の問題点を総括する。

なお、以上の文献学的研究とともに、罪責と赦しに関する東西文明間、および古代と近現代の文明間の比較研究も推進し、西洋と東洋の研究機関、博物館、歴史遺跡等で現地調査を行なう。

４．研究成果

(1)ギリシア初期からローマ帝政時代までの叙事詩文学を中心として、個人間および共同体間の危機的関係における罪責と赦しの観念を探り、その変容を跡づけた。多方面の知見と成果を得たが、とくに重要な成果としては次の点が挙げられる。

(2)前８世紀末のホメロスの叙事詩『イリアス』を対象として、そこに描かれた四つのモデル社会(すなわち①トロイアでのギリシア軍の競争的社会、②トロイア人の家族的融和社会、③オリュンポスの神々の中間的社会、④比喩やアキレウスの盾に描かれた詩人と同時代のギリシア社会)を分析し、トロイア人社会に象徴される融和的文明が、ギリシア軍に代表される競争至上主義社会の欠陥を補填し、人間世界の未来の道標になりうることを、詩人が示そうとした点を明らかにした。

(3)ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』を対象として、オデュッセウスと求婚者たちの争いのプロセスを綿密に分析し、罪責と赦しの意識が社会的紛争の解決に向けていかなる働きをするのかを考察した。

(4)平和と戦争の基本概念について『イリアス』と『オデュッセイア』を全体的に検討し、平和に関しては紛争処理の公的な仲裁システムが確立していること、また戦争についてはそうした仲裁システムが欠如していることが両叙事詩の平和観と戦争観の根底にあることを検証した。

(5)古代から現代に至るホメロスの叙事詩文学の受容史を考察し、とりわけ20世紀における戦争をめぐる罪責と赦しの問題がその古典作品の解釈に深く影響を及ぼした点を明らかにした。

(6)ウェルギリウスの叙事詩『アエネイス』を対象として、ローマ時代の他者に対する罪責と赦しについて考察した。この作品では、ローマ帝国という多民族を統合した市民共

同体の成立を背景として、個人・家族・社会・民族・性などの次元でギリシア文明時代とは異なる他者像が描かれる。それらを文学テクスト内外の文脈と関連づけることによって、人間関係のさまざまな側面での新たな共同体意識の形成と発達を探った。

(7)以上の研究活動を省みて、人文学・古典研究はそれ自体の専門的研究に埋没せず、そこから得られた成果に対していっそう一般的な次元の評釈をみずから施して敷衍することにより、古典が内蔵する普遍的な意味や価値を同時代の世界と社会に対して開示し、より広汎な人々との対話と批判を取り入れていく方法もまた、総合的には重要で効果的であることを再認識した。

さらにその意味では、本研究代表者小川がNHK文化センター(名古屋)で過去25年間担当してきた市民・社会人向けの西洋古典と世界の文明に関する連続講義(本研究期間の2013~2017年度には合計108回開催)もまた、最新の学術研究の社会還元の役割を果たすとともに、本研究自体の深化と意義づけに貴重な機会と養分を提供した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

①小川　正廣、ホメロスの叙事詩の評価をめぐって—古代から現代までの受容の問題—、査読有、続　英雄詩とは何か(中央大学人文科学研究所研究叢書64)、2017、pp.51-88

②小川　正廣、ホメロスの復権とアキレウスの盾、図書、岩波書店、査読無、第807号、2016、pp.28-32

③小川　正廣、ホメロスの環は閉じられない—古代叙事詩の再生をめぐって—⑵、名古屋大学文学部研究論集(文学)、査読有、第62号、2016、pp.1-36

④小川　正廣、ホメロスの環は閉じられない—古代叙事詩の再生をめぐって—⑴、名古屋大学文学部研究論集(文学)、査読有、第61号、2015、pp.9-36

⑤小川　正廣、ウェルギリウス『アエネイス』の結末と戦争の罪責、名古屋大学文学部研究論集(文学)、査読有、第 60 号、2014、pp.1-36

⑥小川　正廣、ローマ神話と歴史の傷跡、月刊名大文学部、査読無、第 42 号、2013、p.1

〔学会発表〕（計１件）

小川　正廣、『オデュッセイア』における戦争と平和—叙事詩の結末部をめぐって—、日本西洋古典学会第69回大会、2018/06/03、於名古屋大学

６．研究組織

(1)研究代表者

小川　正廣（OGAWA, Masahiro）
名古屋大学・人文学研究科・名誉教授
研究者番号：40127064

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし

(4)研究協力者

該当なし